

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Scholarly Contributions by Bronisław Piłsudski : Bronisław Piłsudski Collection at Sakhalin Provincial Museum

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 和義 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003756

サハリン州郷土博物館のピウスツキ資料

大 塚 和 義*

ソ連邦サハリン州の首都ユージノ・サハリンスク（旧豊原）市にあるサハリン州郷土博物館に Б. О. Пилсудский 関係資料が存在することをわたくしが知ったのは、サハリンをはじめて訪れることができた1981年の6月のことであった。そこで手にした、博物館案内の小冊子に、「19世紀後半～20世紀初めの北方少数民族」の章があり、そこにピウスツキのコレクションが展示されていると記述されていたからである[Управление Культуры Сахалинского Облисполкома]。しかし、実際に民族室の展示物を見ても、プレートには、品名と用途などが簡略に記されているだけで、収集地や収集者については触れていないため、どれがピウスツキの手になるものか判別できなかった。あいにく民族室担当のスタッフも調査にでかけていて留守のため、質問もできずじまいであった。ひとつだけ、民族室の壁にピウスツキの肖像写真と簡単な人物紹介を記したプレートが眼にとまった。そこには、「ベ・ピウスツキは、1887年より1905年まで流刑されていたとき、サハリンの原住民の風俗、慣習について調査した。アイヌとオロッコの多数の民族学的調査について記述し発表した。」とある。おなじ壁には、Л. Я. Штернберг, М. М. Добротворский, Г. И. Невельской など、サハリンにゆかりのある人びとのプレートもある。

その後、1983年のサハリン訪問の際に、博物館の В. М. Латышев 館長や、В. О. Шубин 主任学芸員らの厚意で、展示物のなかから、ピウスツキ収集とおもわれる5点の資料について、教示を受けることができた¹⁾。さらに、1985年5月のわたくしにとって4回目のサハリン訪問で、資料について詳しい М. М. Прокофьев 学芸員と逢うことができたことによって、ピウスツキ収集品の一部が確定できた。

それは、すべてで8点の資料で、いずれもサハリンにおいて1899年に収集されたものであった。ニブヒのもの4点とアイヌのもの4点である[大塚 1985]。これは、かつてウラジオストーク市にあるヴェ・カー・アルセーニエフ名称、沿海州郷土博物館が所蔵していたもので、1959年に博物館相互の資料交換によって入手したとのこと

* 国立民族学博物館第一研究部

1) 詳しくは、筆者がサハリン郷土博物館において実見したピウスツキ資料についての紹介記事〈1983年8月9日北海道新聞朝刊〉および[大塚 1984] 参照のこと。

であった。このときのサハリン州郷土博物館スタッフの説明では、資料台帳やラベルなどを照合すれば、所蔵するピウスツキ資料はもっと多く、おそらく20点はあるであろうと語ってくれた。

ピウスツキ収集と確認できた8点の資料は、いずれも民族室に展示公開されている。つぎに、その品名と観察所見を記す。

1. 魚皮靴 男用, ニブヒ

少なくとも、採集時から87年間も経過しているとはおもえないほどで、保存状態がきわめてよく、魚皮のなめしも仕立てもみごとなものである。ことに、靴底部分には、鱗の痕からみて魚体のもっとも大きい肉厚の皮が用いられている。とうぜんのことであるが靴底には、腹割りされた魚皮のかたく丈夫な背鰭部分を地面にあたる位置にするなどの工夫がみられる。爪先の曲線部は、皮を細かく折りたたんで襷をつくって仕上っている。

2. 矢, ニブヒ

先端の水滴状にふくらみをもった部分から矢柄まで、本体は一木造りである。目測で、全長およそ80cmほどである。矢柄の基部には、鳥の羽根がつけられている。先端には鋭利な鉄片が鏃としてはめこまれている。注目されるのは、先端に寄った位置に横向きに尖った鉄片がとりつけられていることである。この役割は、獲物に射こんだときに傷口を拡大し打撃を強力にするためとか、反対にこの位置までしか獲物の体内にいくこまないようにする一種のストッパーとか、さまざまな推測が可能である。もしもストッパーだとしたら、熊送り儀礼のときに、熊に致命的ではないが痛みを感じて暴れるように工夫したものではなかろうか。これは、アイヌの熊送りにみられる花矢とおなじ機能のものであるとみなしたい。つまり、熊は、射られても刺激を感じるだけであるが、これによって、哮りくる熊の姿をみて神霊となって神がみの世界へ帰還できることをこのうえなく喜んでいるものとアイヌは信じたのである。矢の形やつくり方から、本来は飛ぶ鳥を衝撃によって落下させて捕獲する、鳥用の矢を転用したとおもわれる。

なお、展示ラベルには、ロシア語で「1904年、ピウスツキ収集による」となっていて、リストとは異なる点は注意を要する。

3. 地床式住居模型 冬季用, ニブヒ

地面から直接、丸太を校倉に組みあげた一間造りの主室と、板材の外壁をもつ入口

部分からなる。屋根は二斜面をもついわゆる切妻で、樹皮で葺かれている。主室の中央の屋根は、煙出し口が方形に開けられている。つまり、この直下に炉が設けられているわけである。Ч. М. Таксамиによると、この冬季用には、10月から翌年の5月まで住んだという [Таксами 1961]。また、この型式の住居は、19世紀後半から20世紀にかけて、ニブヒの居住地で急速に普及したものである。

4. 高床式住居模型 夏季用、ニブヒ

これは、二列の支柱の上に、桁を置き、これに直角に床丸太を敷きつめ、さらに横に丸太を積んで壁をつくり、切妻の屋根をもつ住居である。この模型の支柱は、8本からなるもので、これが標準的な規模といえる。夏季は、海岸や河川に面した湿気の多いところに住むので、風通しがよく、群がるブヨやカをかなり避けられる高床構造を求めたのであろう。

5. 網針 アイヌ

魚網を編みつくろう針である。サハリンでは、ニシンを掬い獲る直径 1 m 20 cm ほどもある大きな袋をもつタモアミがよく使われた [知里・山本 1943: 103] ので、これに対応するものであろう。注意ぶかくみると、先端に小さく尖ったくびれ部をもっている。これとまったくおなじ形状のものが、ニブヒにおける機織りの杼とする記述がみられる [河野(編) 1976: 102] が、杼ではなく網針である。

6. 杼 アイヌ

両端の環状部分の切れ目より糸を巻きとっておき、機織りのときに、これを杼 ahun-nis として使う。

7. 糸巻類似の木製品 アイヌ

長方形の木板で、その一端の隅をまるく整形し、そこに孔をあけ、側縁の一方に鋭い切り込みを入れてある。形状から糸巻もしくは、機織りの際に縦糸を結んでおく鈎などが考えられるが確かなことは不明。あるいは、罾などの仕掛けの一部かとも考えられる。

8. 機織りの部品類似の木製品 アイヌ

U字形の基部に突起部をつくり、その三つの突端に小さな孔をあけてある。タテ糸を上下に開いておくための三角形の空間をつくる部品 (kamase-ni) の側面につけられる部材の片方とも考えられるが、断定できない。

これまでみてきた資料のほかに、このサハリン州郷土博物館には、ピウスツキの直接収集によるもの、あるいはこれに関与したとみられるものが収蔵されている。それは、ピウスツキが投獄されていたアレクサンドロフスクの博物館蔵品であったものが、1945年の敗戦によって、日本は統治していた南サハリンを失い、ソ連邦が全サハリンを領有することになった結果、ユージノ・サハリンスクにサハリン州の中心的博物館を創設するため、かなりの資料が移されたからである。

このアレクサンドロフスクの博物館は、1894年に設立の気運がおこり、ただちに資料収集がはじめられた [Латышев 1975]。これに従事したのは、この地の政治徒刑囚たちであり、ことに Л. Я. Штернберг, А. Ульянов, それにピウスツキによってであった。この島の原住民の生活用具のほか、魚類や鳥類の標本が多数集められ、1896年12月の開館時には、収蔵品は1000点を越していた。博物館は好評で、サハリンの学術と文化の啓蒙に中心的役割をはたした。そして、沿海州やペテルブルグの学者と密接な研究交流をもち、さらに、ハンブルグなど外国の博物館とも結びつきをもっていた。しかし、博物館活動が順調におこなわれたのは、せいぜい10年ほどであった。1904年2月にはじまる日露開戦から1905年9月のポーツマス講和にいたるまでの時期に、アレクサンドロフスクに進駐した日本の軍隊によって、数多くの資料標本が日本本土に持ち去られたという。長さ 30 m もある鯨の骨格でさえ、略奪をまぬがれえなかった。ポーツマス講和後、博物館は部分的に再開されたが、1920年の尼港事件によって北サハリンはまたしても占領され、アレクサンドロフスク博物館蔵品が日本によって略奪されたという。北サハリンから日本の軍隊が撤退した1925年5月に、アレクサンドロフスクで、この地方のソビエト政権の復興がなされ、その翌月には、早くも博物館再建の決定をサハリン革命委員会がくだした。資料収集の主眼は経済機構、民族学、徒刑、それに『サハリン紀行』を著わした А. П. Чехов のサハリン島旅行についてのものなどであった。1932年博物館は、523 m² の展示面積をもち、自然、革命前史、社会主義建設の三部門より展示構成されていた。1940年における館蔵品は、5000点を数えるにいたった。1945年の日本の敗戦によって、南サハリンもソ連領となり、1947年の統一サハリン州成立後、ユージノ・サハリンスクに州郷土博物館が置かれた。この頃に、アレクサンドロフスク博物館に残っていた、かつてピウスツキらが収集に関与した資料の多くが移管されたという。

このアレクサンドロフスク博物館より移された多数の資料のうち、14点の民族資料をわたくしは確認できたので、これも紹介しておきたい。番号は前記のものから通しで付ける。

9. 獣皮衣 ニブヒ

そで口には美しい文様が配され、裾まわりには、真鍮製の飾り金具が連なってつけられている。

10. 11. 木さじ ニブヒ

いずれも、美しい彫刻で飾られた木さじで、熊送り儀礼のときに、熊肉の饗食に用いられる。

12. 13. 柄付き容器 ニブヒ

いずれも、熊送り儀礼のときに、熊肉を盛るための特別な容器で、柄の部分や先端に熊をモチーフにした彫刻を中心に、入念な装飾文様が施されている。

14. 容器 ニブヒ

楕円形をした容器の縁に、鳥の頭と尾、それに両羽根を彫りだしてある。儀礼用であろうか。

15. 16. 油入れ袋 ニブヒ

トドやアザラシの胃袋を洗ってから、空気を入れて形をととのえて乾燥させたもので、灯火や食用にする海獣の油入れに使う。

17. 魚頭打棒 ニブヒ

サケなどを捕獲したとき、暴れてうっ血痕ができると味が落ちるため、すぐさま頭をこれで打って殺す。

18. 鎌 ニブヒ

棒に鉄鎌をとりつけたもので、おそらく野草の刈り入れに用いたものであろう。

19. 霊棺 ニブヒ

ニブヒにおいては、死者は火葬にされて、遺骨はその場に放置されるが、その傍に小さな家屋を形どった霊棺を設ける。その内部に霊的象徴物を納める。

20. 弓 ニブヒ

全体が幅広で、中央の矢をつがえる部分が握れるよう細くなっている。飾り金具を配し、漆塗りのみごとな仕上げで、専門的職人の手になるもの。おそらく清朝から入手したものであろう。

21. 熊つきぎ鎖

首輪は、熊が痛がらないように木綿糸とおもわれる繊維束でできている。鎖は鉄の環をつないだきわめて頑丈なつくりである。

22. 熊送り儀礼場面模型 アイヌ

展示プレートによれば、「19世紀末に、アレクサンドロフスク監獄の政治徒刑囚たちによってつくられたパン細工」であるという。すこし詳しく観察すると、熊送りのクライマックスである殺害直前の光景を描写したものであり、細部にわたってじつに正確であることが分る。熊は左手前にみえる檻から、飼い主の家の前にひきだされ、熊つなぎ柱のところで2人の男によって紐で行動を抑制されている。さらに、その背後には、別の2人の男が棒をもって、もしも紐が切れて暴れだしたときに抑え込むため警戒している。樹立ちの前には、呉座がたてかけられて、これに宝物の刀などが供えられてある。熊つなぎ柱の頂上には、削り掛けが飾られ、すぐそばに建てられた別の柱の上部には、犠牲にされたイヌが吊下げられているのが見える。吼える熊に向かって、ひとりの男がうやうやしく膝を折り、その隣りの人物は、ひれ伏している。おそらく、殺害する前の祈詞をささげているのであろう。その左には、2人のアイヌがいる。檻の付近には、ロシア人が4人。警官か獄吏とおぼしき者、それに高官らしき者など。イヌつなぎ場には、3頭のイヌが熊を注視している。母屋の前には、5人の成人と2人の子ども。この群れの右端の者は、両手を眼にあてており、泣いているようすだ。その足元には、酒を入れたとおぼしき樽と杓子。

さらに丹念に調べれば、より多くの描きこまれたことがらを見つけることができるであろう。問題は、これほどの熊送り儀礼の詳細な再構成は、だれにでも可能ではなく、政治犯たちが共同でつくったことは事実としても、民族学に造詣のふかい指導的な人物がいなくてはむりであろう。それが可能な人物としては、Л. Я. Штернберг かピウスツキぐらいであろう。Л. Я. Штернберг は北サハリンのニブヒを主眼にしていたので、わたくしは、ピウスツキがこのパン細工づくりに関与していた可能性が強いとみたい。このように、アレクサンドロフスク博物館から移された資料の今後の検討によって、ピウスツキ収集もしくは関与のものが、少なからず明らかになることであろう。事実、1985年5月に、サハリン州郷土博物館の訪問を終えて帰国してから、2カ月ほど後に、送付してもらった新版の博物館案内 Краеведы Ведут Поиск には、つぎのことが記されていた。博物館が所蔵する「ピウスツキ収集品は、すべてで81点あり、そのうちアイヌのものは42点である」[Прокофьев 1985: 39] と。これ

を読んで、わたくしの胸は高鳴った。博物館のスタッフが近年精力的に調査をすすめた結果であろうか、さらに収集地や収集年月日が明らかになれば、ピウスツキの足跡がこれまでより明らかとなろう。そればかりでなく、ピウスツキが資料の収集をどのような姿勢と方法でとりくんだかが解明できるであろう。おそらく、ひとつの儀礼や労働単位ごとに使われる用具を、入手できて搬送可能なものはすべてセットで収集しているようにみうけられる。サハリン州郷土博物館をはじめ、ソ連邦の各地に散在するピウスツキ資料が、リストにまとめられ体系的に把握できる日も近い将来とおもわれる。ソ連邦が保管するピウスツキ資料は膨大で、一国家では最大のコレクションを形成するとみられるからである。ちなみに、1971年時点で Т. С. Шульгина の講演発表によれば、ウラジオストークの沿海州郷土博物館には、ピウスツキの収集した、ニブヒ、アイヌ、ナナイ（ゴリド）の三つの民族資料があわせて353点も所蔵されているということである [Шульгина 1973: 274-307]。このほか、レニングラードの民族学博物館所蔵のものなどをあわせれば、眼をみはるものがある。

追 記

脱稿後、サハリン州郷土博物館が1960～1973年の間に受理した民族学資料所蔵目録が出版されていることを知った [Вязовская 1975]。これをみると、ピウスツキ収集と明記されたものが10点あり、いずれも、1959年にウラジオストーク郷土博物館と資料交換によって得られたものである。それは В. В. Вязовская と Е. Т. Елина 両氏によって選別され、1960年にサハリン州郷土博物館蔵として正式に受理された。その内訳は、つぎのとおりである。

1. 収蔵番号 1856 冬用魚皮製靴 ымкто-ки 1899年サハリンで収集、ニブヒ
2. 収蔵番号 1855 魚皮製履物 1899年サハリン収集。ニブヒ
3. 収蔵番号 1965 金属製鎌付き矢 ку 1899年サハリン収集。長さ 80.5 cm, ニブヒ
4. 収蔵番号 1835 白樺製水汲み杓子 мурс 1899年サハリン収集。ニブヒ
5. 収蔵番号 1850 食事用木匙 лувр 1904年収集。ニブヒ
6. 収蔵番号 1837 調理用杓子 кырр 1903年収集。ニブヒ 長さ 39.5 cm
7. 収蔵番号 1838 調理用杓子 1903年収集。
8. 収蔵番号 1852 食事用木匙 лувр 1899年収集。ニブヒ 長さ 25 cm
9. 収蔵番号 1851 食事用箸 чавк 1904年収集。ニブヒ 長さ 26.5 cm

10. 収蔵番号 1826 卓 тыр 1903年収集。ニブヒ 長さ 45×25cm, 高さ 7 cm

このリストで明らかになったのは、収蔵番号1856のものが、前記の資料1と同じものであること。また、収蔵番号1965のものが、資料2に相当すること。これによって、資料2の展示ラベルの収集年は、誤りである可能性が強まった。

さらに、収集年の確定できたものは、重複の2点を除くと、つぎのようになる。

1889年収集 11点 (内、ニブヒ 7点, アイヌ 4点)

1903年収集 3点 いずれもニブヒ

1904年収集 2点 いずれもニブヒ

収集年の明らかな16点の資料だけで、推測することは困難であることを承知のうえで、若干のことがらについて述べてみたい。1899年の収集品は11点と、もっとも多いが、ピウスツキは、この年にはウラジオストーク博物館の仕事をおこない、サハリンの植物標本と200以上の名称を数えるニブヒの生活用具を収集したとされる[Шульгина 1973: 275]。また、1903年と1904年の収集品は、ピウスツキが1902年7月にロシア帝国科学アカデミーの依頼で、アイヌとオロックの生活用具収集のため、ウラジオストークからサハリンに赴き、1905年6月11日まで島に滞在したとき得た可能性が強いものであることは、いうまでもない。

文 献

大塚和義

1984 「甦る樺太アイヌ語」『百科年鑑1984』平凡社 81。

1985 「北方少数民族の世界——ソ連邦サハリン郷土博物館の展示」『季刊民族学』33: 36-43。

知里真志保・山本利雄

1943 「樺太アイヌ民具解説」『樺太庁博物館報告』5(1): 81-110。

河野本道編

1976 『北方の民具Ⅰ』札幌：北海道出版企画センター。

Латышев, В. М.

1975 Из Истории Сахалинского Музея. *Земля, Которую Люблю* Южно-Сахалинск. 87-95。

Вязовская, В. В.

1975 *Каталог, этнографических коллекций*. Южно-Сахалинск。

УПРАВЛЕНИЕ КУЛЬТУРЫ САХАЛИНСКОГО ОБЛИСПОЛКОМА.

1975 *Сахалинский Областной Краеведческий Музей Путеводитель*. Южно-Сахалинск。

Прокофьев, М. М.

1985 Айны Южного Сахалина. *Краеведы Ведут Поиск*. Южно-Сахалинск。

ТАКСАМИ, Ч. М.

1961 Селения, жилые и хозяйственные постройки нивхов Амура И Западного

побережья О. Сахалина (Середина 19-нач 20 в) *Сибирский этнографический сборник*, т. 3, Москва-Ленинград.

- 1964 Дар нцвхов Музею анропологцц ц этнографцц. *Сборник музея Антропологии и Этнографии*. XXII. Изд. Наука.

Шульгина, Т. С.

- 1973 Б. О. Пилсудский-исследователь Народов Сахалина. *История и культура Народов Дальнего Востока*. Южно-Сахалинск.



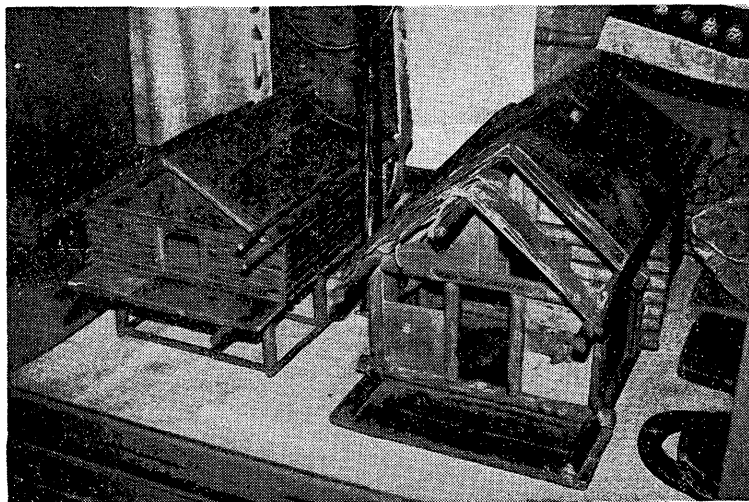
① サハリン州郷土博物館（建物は、日本領有時代の1937年に城の櫓を模した旧樺太庁博物館のもの）。



② サハリン州郷土博物館民族室におけるピウスツキの肖像写真と紹介記事。



③ 魚皮靴（男用，ニブヒ）サハリン州郷土博物館所蔵。



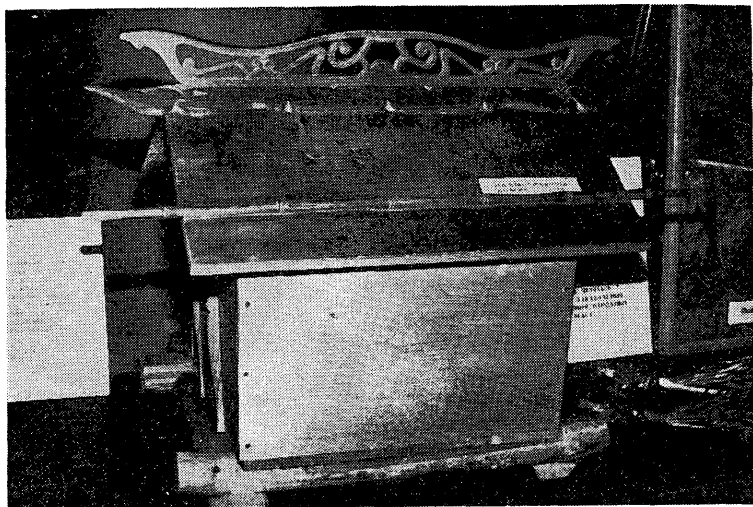
④ 右 地床式住居（冬季用），左 高床式住居（夏季用）（いずれもニブヒ）模型，サハリン州郷土博物館所蔵。



⑤ 右から、網針，糸巻類似のもの，杼，織機の部品類似のもの（いずれもアイヌ）サハリン州郷土博物館所蔵。



⑥ 獣皮衣（ニブヒ）サハリン州郷土博物館所蔵。



⑦ 霊棺（ニプヒ）サハリン州郷土博物館所蔵。



⑧ 熊送り儀礼場面模型 パン細工（アイヌ）サハリン州郷土博物館所蔵。